ロマン派のリートにおける一考察

―― フランツ・シューベルト ――

藤田まゆみ

A Study on Romantic Lieder

――Franz Schubert――

by

Mayumi FUJITA

はじめに

まず，ロマン主義という言葉の意味であるが，元来はロマン語で書かれた物語り Roman のことで，ロマンスにも通ずるようになった。芸術上にこの主義が起こったのは，まず文学であった。ここではすべて個人の感情や趣味，才能が，全然さえぎられるものなしに表現される。つまり作曲家の癖が強く出る。だから形式に支配された古典主義とは理論的に対立するもので，古典主義の音楽が線的で鮮明なのに対して，ロマン主義の音楽は色彩的であり，情熱的であり，主観的で空想的な要素の多い音楽である。

リートは古典派にはいってから作られるようになり，モーツァルト，ベートーヴェンが基礎を築いたが，本格的な基礎はロマン派のシューベルトが完成したといえる。そこで，ここではシューベルトのリートについてとりあげてみる。

I 生涯

1797年1月31日ウィーン郊外に生まれ，1828年11月19日ウィーンで没した。シューベルトの父は小学校の教師で家が貧しかったために，子供のシューベルトは11歳の時から教会の合唱隊にはいった。1808年，12歳の時，彼は王立コンヴィクト学寮にはいることを許可された。これは，本来貴族学校で，大学にはいるための予備校であったが，同時に楽才のある少年を給費生として入学させ，王室の礼拝堂の少年歌手としたのである。ここにいる間に，彼は各種の音楽を自身で演奏する機会を得たこと，その上に良い教師や友人をも得られたことは幸福であった。また数年間は宮廷指揮者のサリエリから作曲，理論を学び，ハイドンやモーツァルト，ベートーヴェンなどの作品にも十分ひたることができた。変声後学寮を退き，1814年から父の経営する小学校の教師になったが，子供たちを教えるより，音楽ばかりに夢中になっていた。1815年の冬の初め，彼はゲーテの詩集の中から≪Erlkönig≫を見出し，たちまち作曲した。また≪Heidenröslein≫もこの年の作である。この他，数からいえば，この年は彼の一生の間で最も作品の多かった年で，約145曲におよんでいる。そして本格的なリートの作曲家としての活動が始まるのである。1816年彼は新設のライバッハの師範学校の教員の職を得ようとしたが意を果たすことはできなかった。彼のすばらしい才能を高く評価していた友人のショーベルは，彼を父の家から引き離して，自分のへやに住まわせ，音楽に専念させようとした。これか

らが，彼の一生の間続く一種の放浪生活の始まりである。この年には ≪Der Wanderer≫ が作曲されたが，これは実にシューベルトの一生の運命を予言するものであった。このリートは作曲当時，非常にポピュラーであった。翌年ショーベルのへやを出て下宿をし，父の学校に通って生活の資を得た。たまたま当時第一流の声楽家フォーグルに認められ，彼の歌唱によって，この青年作曲家が徐々にではあるが，確実に世の中に認められるようになったのである。

1818年一定した職もなかったシューベルトは，友人の推薦でエステルハージ伯爵の家庭教師となり，同家の2人の令嬢（マリエ，カネローニ）にピアノと声楽を教えた。この年は，ツェレス滞在中の作である ≪Litanei≫ をはじめ，当時ウィーンで大当たりをとっていたロッシーニの歌劇に刺激されて，翌年のはじめにかけて，歌劇 ≪Die Zwillingsbrüder≫ を作曲，また，1819年にはフォーグルに伴われて北オーストリアを旅行した。この旅の結果，ピアノ五重奏曲 ≪Die Forelle≫ など明るい作品が生まれた。なお，この年にシューベルトのリートが初めて公開演奏会で歌われたのである。1822年にはベートーヴェン，ウェーバーなどと会っており，この年には彼の教会音楽の代表作とされるミサ曲 As dur，交響曲第8番 h moll ≪Unvollendete≫ が書き始められた。1823年のはじめ健康を害し，一時は入院までしたが創作は続けられていた。この年は一方，夏にフォーグルとオーストリア北西部を旅行したり，グラーツの町から音楽協会名誉会員に推薦されたりして気分と健康を回復し，歌曲集 ≪Die schöne Müllerrin≫ に着手。また ≪Auf dem Wasser zu singen≫，≪Du bist die Ruh≫などを作曲した。1825年，小康を得たのでまたフォーグルと楽しい旅行に出て，≪Ave Maria≫ などを作曲，そしてリートの作曲家として相当な注目を浴び始めた。翌年ごろから不規則な生活のために，再び健康をそこねた。しかし作曲活動はますます盛んで，弦楽四重奏曲 ≪Der Tod und das Mädchen≫ や数々のピアノ曲，歌曲集 ≪Winterreise≫ などを完成した。1828年にはかねてから友人の勧めで，シューベルトは初めて自作の発表演奏会を開き，大成功を収めた。また，のちに ≪Schwanengesang≫ としてまとめられたリートのうち13曲を作った。弱ったからだに悪性の発疹チフスを併発し，この年の11月19日，兄フェルディナントのもとで永遠の眠りについた。その時31歳であった。

Ⅱ 作　　風

シューベルトとベートーヴェンとは同じウィーンに住み，その創作活動期の一部は並行している。しかし，この二人の世界は全くかけ離れていて，ベートーヴェンが不如意ながらも貴族社会を一つの大きな目安にして生きた人に対して，シューベルトの方はほとんどそのような周囲を持っていなかった。音楽家として職らしい職といえば，エステルハージ家の家庭教師をごくわずかの期間務めただけで，その他は住居もなく，友人との共同生活の中でボヘミアン的な日課をくり返していたのである。その周囲は，≪Schubertiade≫（シューベルトを中心とした私的な会合）に代表される屈託のない友人達の集まりで，彼らと歌ったり，談笑したりすることが生活の場であり，また創作の場でもあった。シューベルトはこうした庶民生活の中に，ベートーヴェンがとり残した音楽の一分野を開拓したのである。それは演奏会場や劇場のための音楽ではなく，ウィーン市民のごくありふれた日常生活の中に流れる情感を音楽にすることであった。

シューベルトは660曲以上のリートを作曲しているが，その歌詞として選んだ詩は，ゲーテを筆頭にシラー，ヘンデル，マティソン，ハイネ，ミュラーなど8～9人の詩人によるものが

多く，時代にして18世紀のなかごろから，シューベルトの死に至るまでの間のあらゆる詩人のものが含まれている。中でもゲーテの詩が全部で72曲と一番多く，その次にシラーの47曲である。

これらのリートにおけるシューベルトの旋律法は，全く彼独自のものであって，それは歌詞に旋律をつけたというものではなく，歌詞から自然に生まれ出たものであった。詩の感じはそのまま旋律を決定し，旋律は詩の雰囲気を描き出すものであった。その旋律を大別すると，

1　素朴な民謡調の旋律

シューベルトのリートの素朴さは民謡に根をおろしていると言われる通り，彼の旋律の根底には，たしかに郷土的な民俗性が流れている。一例が，≪Die schöne Müllerrin≫の第1曲≪Das Wandern≫も民謡そのものであり，≪Winterreise≫の第5曲≪Der Lindenbaum≫や≪Wiegenlied≫などは世界の民謡のようになっている。

2　ロマン的な哀愁，簡美さに満ちた旋律

シューベルトのロマン主義が一番発揮されているのがリートで，初期を代表する傑作の≪Der Wanderer≫（楽譜1）は，三連符のもの憂い前奏に始まり，はじめは疲れ果てたさすらい人の失望を歌い，次に生気を取り戻し，あこがれの国を夢見るが，再び急にはじめの寂しい現実の世界に戻って，最後は絶望的に終わるという深いロマン的精神にあふれた点で，後期の作品に劣らない名作である。また≪Du bist die Ruh≫は，簡素な上行旋律のなかに，幅広い静かな情熱が盛られ，緊張感をかもし出している。

3　朗唱風な旋律

≪Erlkönig≫（楽譜2），≪Die junge Nonne≫（楽譜3）に代表される通り，不気味な前奏に始まり，伴奏の援けを借り，リートとは思えないほどドラマティックに歌われる。特に≪Erlkönig≫は馬の疾走するさまを描く三連符に始まり，この伴奏の上に，語り手，心は恐怖におののきながらも子どもをいたわる父親，父親に抱かれその腕の中でわななく子ども，甘言をもって子どもの魂を奪い去ろうとする魔王の4人の声を使い分けてドラマティックに歌われる。これらはシューベルトのリートのなかでも最も緊張感に満ちているものである。

の以上3つに分けることができる。

また，シューベルトは伴奏に新しい生命を与えたといえる。それまでの伴奏といえば，歌の旋律を援けるか，和声的な背景を作る従属的な意義しかもっていなかったものを，彼は歌詞の中に出てくる絵画的イメージから伴奏をつけた。そして伴奏により，詩の意味を強めたり，解釈したりもした。歌の旋律と伴奏との関係は，決して厳格に固定されたものではなく，また歌の旋律の方が優位にあるけれども，一種の敏感な柔軟さでもって両者をつなぎあわせている。そして最も単純な方法で書かれた伴奏でさえ，雄弁さが感じられる。

彼のピアノ音楽における作曲上のテクニックは，ベートーヴェンと密接なつながりがあるけれども，音画としての取り扱いは，彼の旋律法と同様独自のものであり，無類であるといえる。たとえば，17歳の時の≪Gretchen am Spinnrade≫（楽譜4）のピアノ伴奏の音型動機は，糸車の回転を表わし，一瞬接吻を思わせるところでちょっと停止するほかは，間断なく奏し続けられている。また≪Der Lindenbaum≫の伴奏音型は，ぼだい樹の葉が微風に震える描写である。そして≪Auf dem Wasser zu singen≫（楽譜5）では，32分音符の伴奏が半音階的進行をし，色彩をそえる役目をしている。この伴奏の上に流れるような美しい旋

律が歌われる。歌は旋律的な部分とリズミカルな部分との組み合わせにより巧みな効果を示し，転調の技巧により不思議な哀愁をたたえている。このようにして，小川のせせらぎ，風のささやきなど旋律では描写しきれないのをピアノの音で補ったのである。

彼が用いた資源の中で，最もすばらしいと思われるものは和声上の手段――転調である。≪An Schwager Kronos≫ の “Weit, hoch, herrlich” の部分や，≪Heimweh≫ の “夕映” など，当時としては大胆な転調を試み，そして成功したといえるのではないだろうか。また一例としてプラトンの詩による ≪Du liebst mich nicht≫ をあげてみると，a moll で始まり，F dur⟶d moll ⟶As dur ⟶e moll ⟶G dur ⟶e moll ⟶Ges dur となり，しばらく調を決定しがたい部分が続き，a moll から A dur を経て a moll で終わるのである。この曲のように転調が激しいものは珍しく，あまり類がないが，歌詞の感情的な内容に対応した転調は他のリートにも多く見られる。転調の方法としては，五度圏の右まわり（シャープ系）に転調すると，感情の高まりや魂の激動を表わし，反対の左まわり（フラット系）に転調すれば，感情の静まり，やさしさ，ロマン的なあこがれなどを表現する。

歌のタイプとしては，≪Heidenröslein≫，≪An Silvia≫ などのような有節形式，≪Der Lindenbaum≫，≪Gretchen am Spinnrade≫ のような変化有節形式，≪Erlkönig≫，≪Die junge Nonne≫ のような通作形式の三種類がある。リートはすでに18世紀の末から他の作曲家によって作られており，そのころはほとんどが有節形式であったが，シューベルトは詩の内容を重視し，変化有節形成という方法をあみ出した。これによって彼はドイツリートの将来をさし示したともいえる。さらに詩の内容と音楽とを密着させればさせるほど，この変化有節形式では飽き足らず，リートの歴史は通作形式へと変わっていったのである。だからシューベルトも形式的にみれば，単純な有節形式のものは晩年に近づくほど少なくなり，通作形式がしだいに数を増していることが目立ち，特に ≪Schwanengesang≫ のハイネの詩に対する附曲に見られる朗唱風のリートは，明瞭に様式の変化を示している。これは前にも述べた通り，詩の内容が重視されれば当然のことと思われる。

そしてまたシューベルトは三つの歌曲集を書いている。そのうち ≪Winterreise≫，≪Die schöne Müllerrin≫ はベートーヴェンから影響を受けた連作歌曲であるが，≪Schwanengesang≫ は連作歌曲ではなく，彼の死後まとめられたもので，題も出版者がつけたものらしい。これらの歌曲集についてはまた別の機会に述べることにする。

Ⅲ　音楽史上における位置

シューベルトは古典主義からロマン主義への橋渡しの位置にある。従来彼をもって音楽史上のロマン主義が始まるとされていたが，最近の研究によれば，彼はまだ自覚したロマンティストでないことが明らかにされた。つまり，作品そのものはロマン派の諸要素を含んでいるが，その様式や作曲態度は古典派であり，むしろ晩年のベートーヴェンの方がよりロマンティックであるというのである。彼の生まれつきの性質がおのずからその音楽に流麗で，しかも感傷的な旋律と和声を与えたため，外観的にロマンティックな音楽になったのであって，シューマンのようにはっきりとした芸術上の主義主張をもって立ったのではない。とはいうものの彼の晩年のリート，特に ≪Winterreise≫ や遺作の歌曲集 ≪Schwanengesang≫ は，ロマンティストたちの踏台になったことは疑う余地もない。このような事情から，音楽史家アインシュタインは，彼の音楽に「クラシック・ロマンティック」という形容詞を与えている。また彼の音

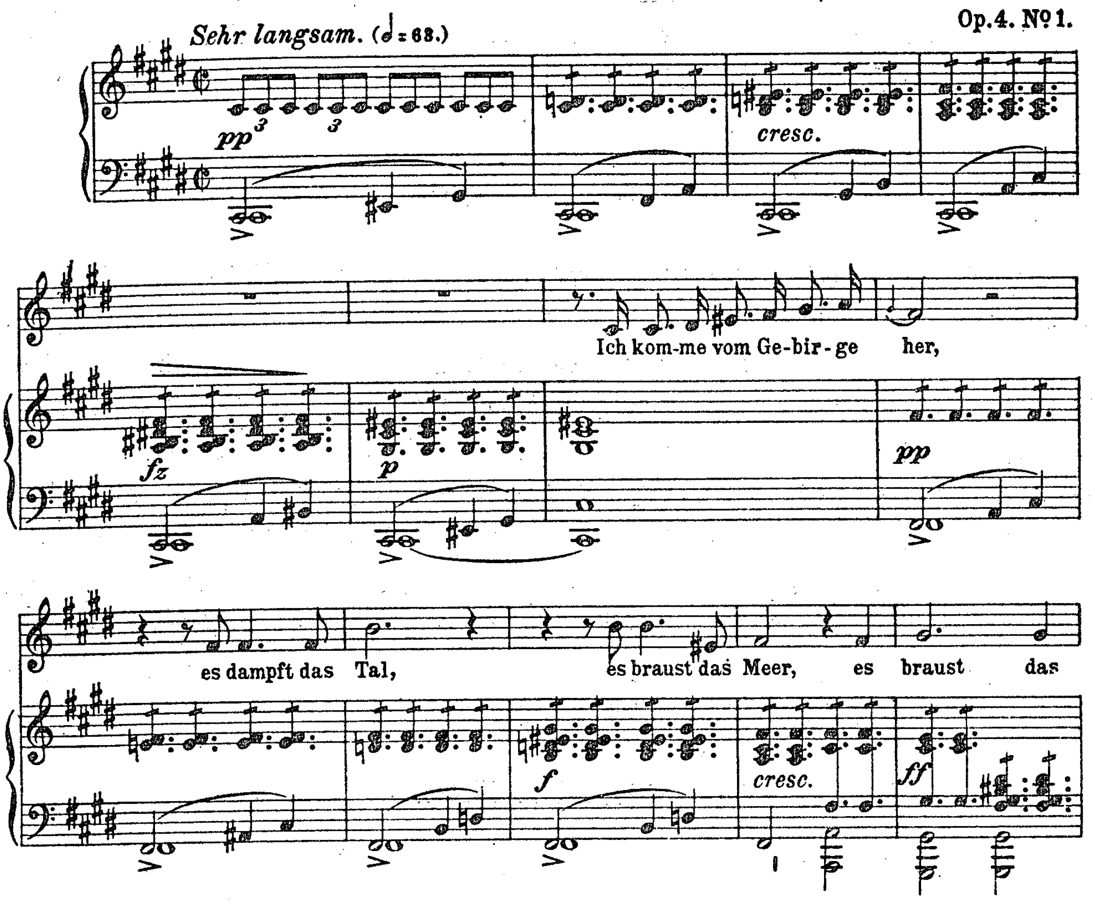
楽を受け入れた階級に着眼してみると，彼の音楽はロマンティックであったと言わざるを得なくなる。なぜならば，彼の音楽をよく理解したのは，これから下り坂になろうとする中産階級だったからである。下り坂の中産階級のための音楽がいわゆるロマン派であるならば，彼の音楽は昔からの見解の通り，ロマンティックなものと言わなければならない。だから，シューベルトの位置はこのような時代的背景を考察の上，初めて理解されるべきものではないだろうか。

要　　約

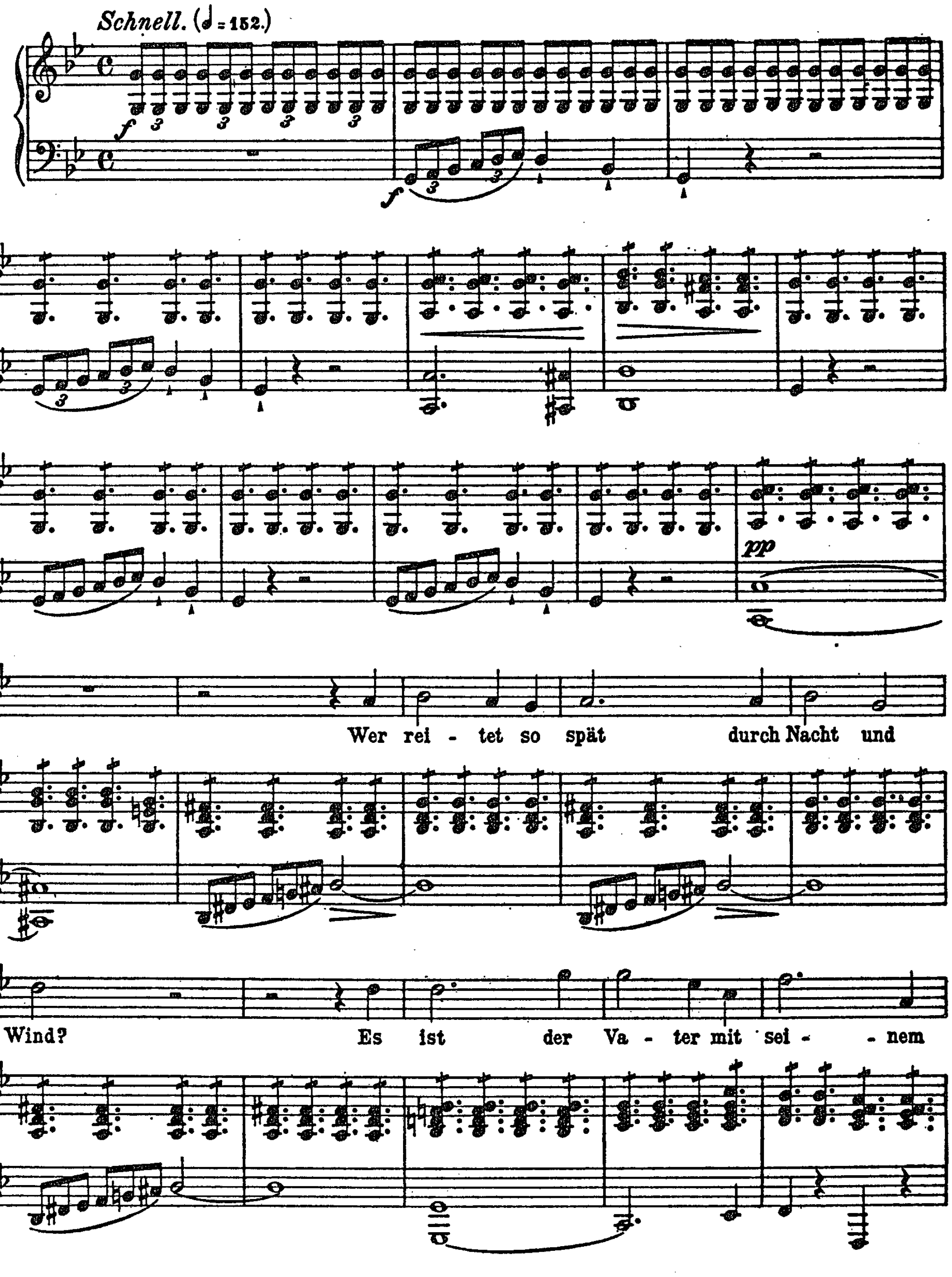
シューベルトは，親しみやすい美の追求者として，リートという新しいジャンルを見出した。そして詩と音楽の融合をはかったリートは，ロマン主義のいわば新しい表現方法であった。シューベルトのリートのどのひとつを取ってみても，そこには何ら作為とか，不自然さとかいったものは感じられない。すべてが彼の本能のおもむくがままに流れ出ている。彼の美しい転調は全く自然で，ベートーヴェンの転調のように，熟考の結果としてのものではない。シューベルトはリートという分野をいっそう重要な，輝かしいものに引き上げ，短い一曲が，大きな交響曲に匹敵する内容をもち得るのだということを，音楽史上で証明してみせたのである。そして形式的には古典派とされ，内容的にはロマン派とされる。このような分裂は時代そのものの反映ともいえる。彼によって開拓されたロマン主義のリートは，歌唱旋律の詩への融合と，伴奏部の発展深化という方向をとりながら，シューマン，ブラームスによって展開され，ヴォルフに至って発展の極地点に達するのである。

参考文献・引用文献

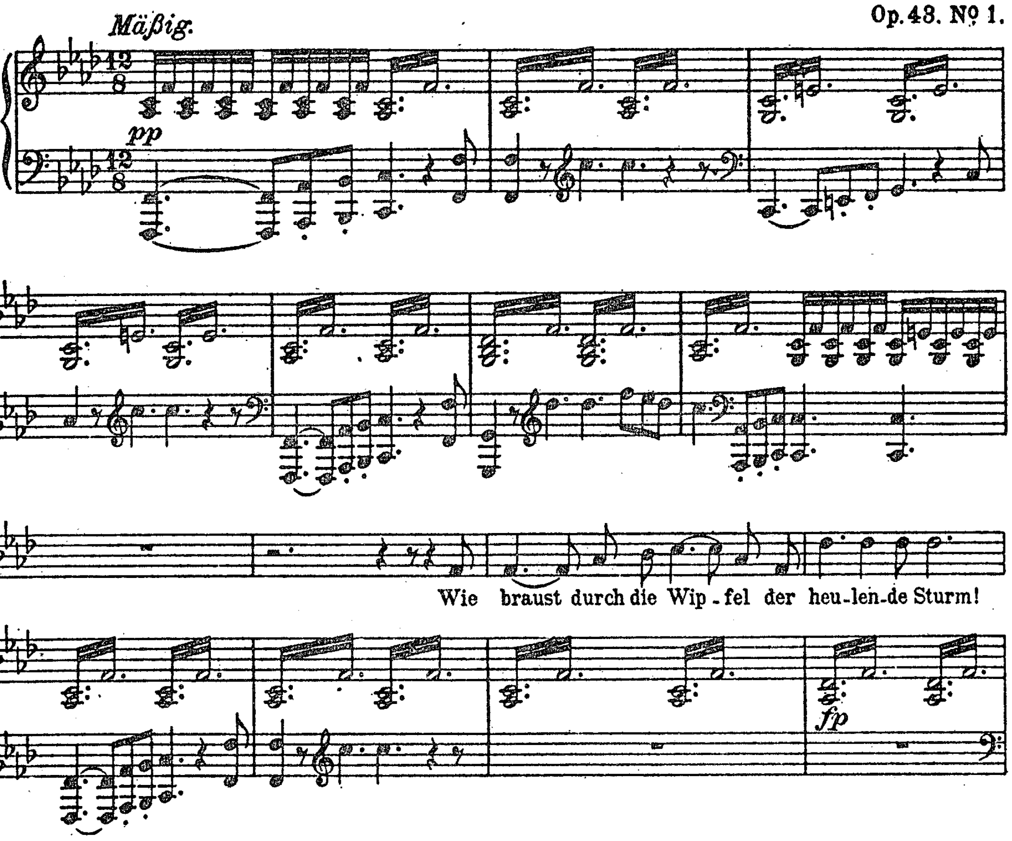
1) 大宮真琴訳：音楽史（アインシュタイン）　ダヴィッド社（1968）
2) 浅井真男訳：シューベルト—音楽的肖像（アインシュタイン）　白水社（1962）
3) 名曲解説全集　声楽曲（上）　音楽之友社
4) Schubert Lieder Band Ⅰ・Ⅱ　Edition Peters


Sehr langsam. (𝅗𝅥 = 68.)
Op.4. No 1.
pp
3
3
cresc.
fz
p
Ich kom-me vom Ge-bir - ge her,
pp
es dampft das Tal,
es braust das Meer,
es braust das
f
cresc.
ff

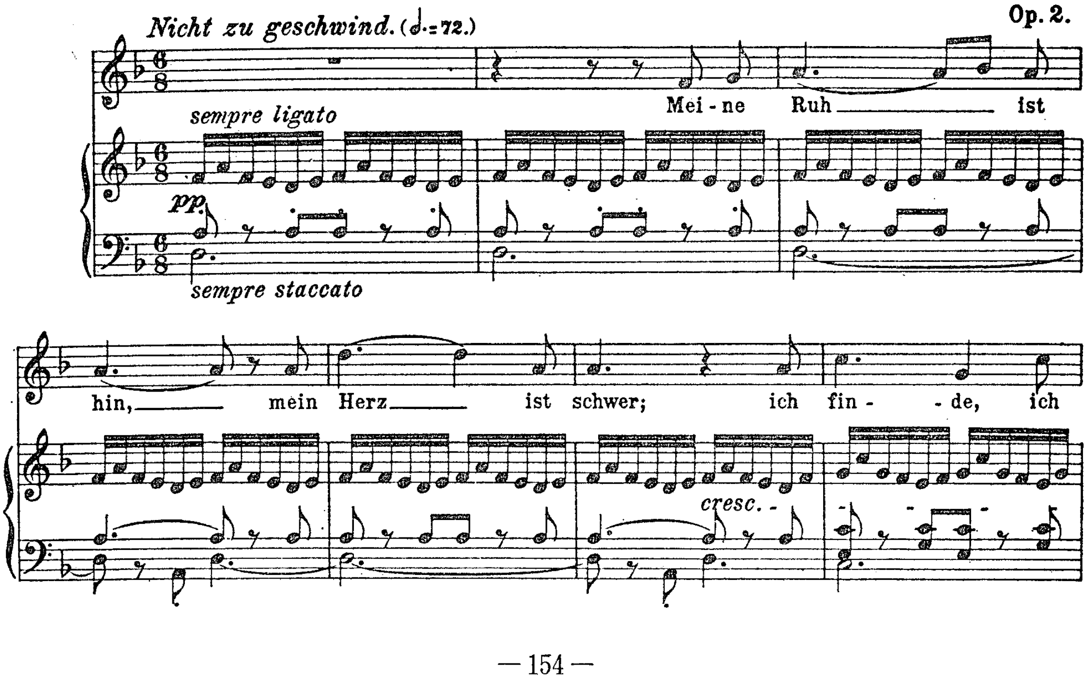
楽譜 2


Schnell. (♩ = 152.)
f
pp
Wer rei - tet so spät durch Nacht und
Wind?
Es ist der Va - ter mit sei - nem

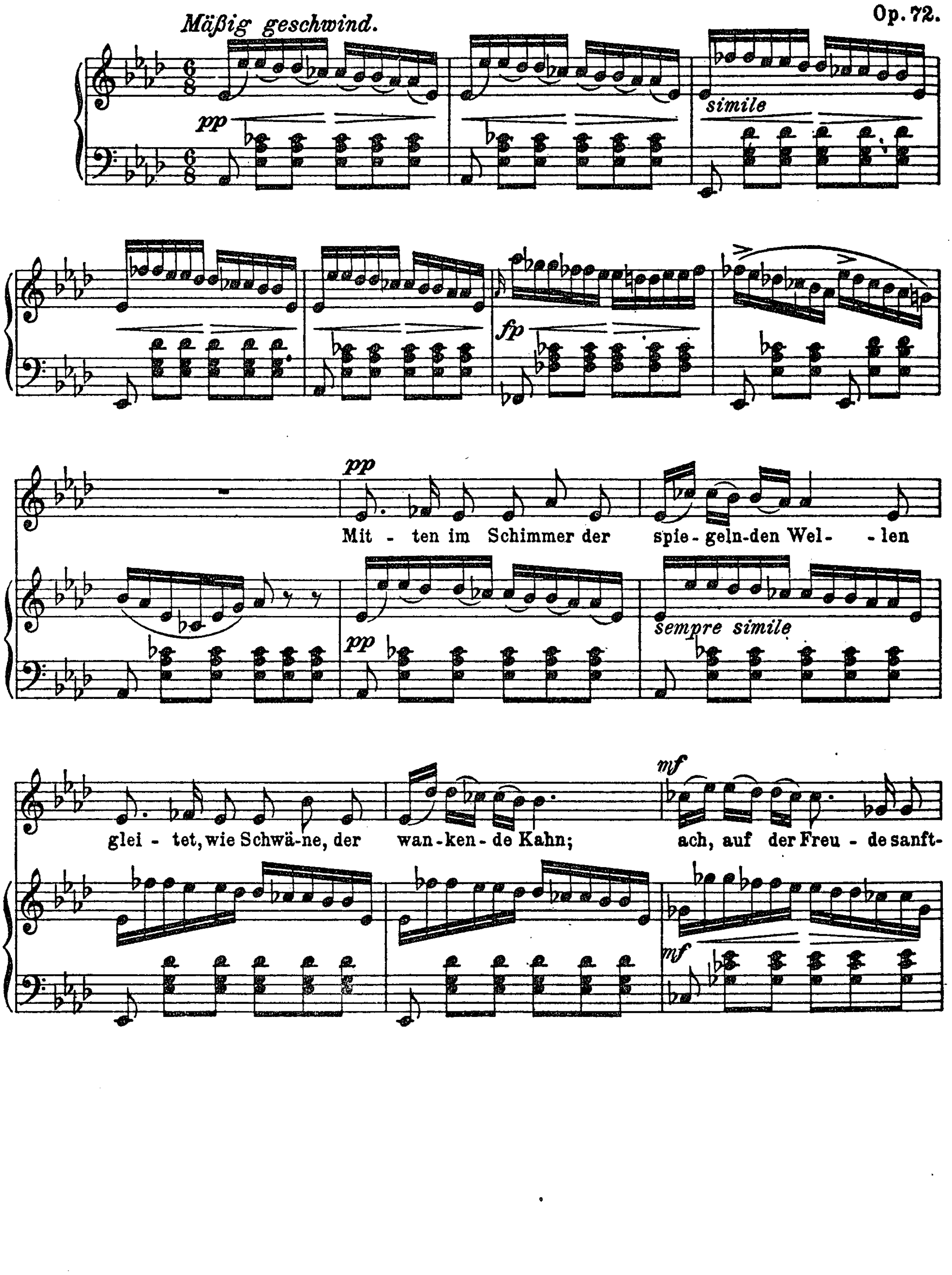
楽 譜 3


Mäßig.
Op. 43. № 1.
pp
Wie braust durch die Wip - fel der heu-len-de Sturm!
fp

楽 譜 4


Nicht zu geschwind. (♩. = 72.)
Op. 2.
sempre ligato
Mei - ne Ruh ist
pp
sempre staccato
hin, mein Herz ist schwer; ich fin - de, ich
cresc. -

楽譜 5


Mäßig geschwind.
Op. 72.
pp
simile
fp
pp
Mit - ten im Schimmer der spie - geln-den Wel- - len
pp
sempre simile
glei - tet, wie Schwä-ne, der wan-ken-de Kahn;
mf
ach, auf der Freu - de sanft-
mf